

## Light in August に於ける Lena Grove 像

横 沢 京 子

### はじめに

*Light in August* (1932) は *The Sound and the Fury* (1929), *Absalom, Absalom* (1936) に並んで Faulkner の重要な作品としての評価を受けている。この作品は the Yoknapatawpha saga の一部分で、地理的に、その中心地は、Faulkner の創作上の架空の町、Mississippi 州 Yoknapatawpha 郡 Jefferson である。時代的背景は、この小説の第 8 章で、Joe Christmas が、娼婦 Bobbie Allen の自動車に便乗し、第 21 章で Lena Grove と Byron Bunch が家具修理販売人の van (truck) に、ヒッチハイクして乗せてもらうことから、自動車が普及しはじめた 1920-1930 年代と考えられ、また Christmas と Brown が密造酒販売 (bootleg) に関係することからも禁酒法 (Prohibition) の敷かれていた 1920-30 年代と推量できる。

本論では、この小説の大切な女性登場人物の Lena Grove に光りをあてて、他の登場人物に対して彼女の果す役割、そして Lena を通して Faulkner の女性観の一端を考察したい。

### (1)

*Light in August* の主人公は、Joe Christmas であるのか、あるいは、Lena Grove であるのかということは、これまでに良く議論の対象になってきている。たとえば、Joe Christmas に主点を置いたものでは、John Longly の “Joe Christmas: The Hero in the Modern World” (*Faulkner: A Collection of Critical Essays*, ed. by Robert Penn Warren, Englewood Cliffs, N.J., 1966), David Minter の *William Faulkner: His Life and Work* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980),

Hugh Ruppersburg の *Voice and Eye in Faulkner's Fiction* (Athens: The University of Georgia Press, 1983) などがあり、特に Ruppersburg は Lena の役割を過小評価しているように思われる。一方、Lena Grove を *Light in August* の “focal point” とみなしたものでは、Norman Holmes Pearson の “Lena Grove” (*Shenandoah*, III, Spring 1952, pp. 3-7), フランスの Faulkner 研究家、François Pitavy の *Faulkner's Light in August* (revised and enlarged edition, translated by Gilian E. Cook with the collaboration of the author, Bloomington: Indiana University Press, 1973) などがある。

Joe Christmas の線を中心に見ると、この小説は、かなり、暗い、否定的な、そして悲劇的な印象を与えるものになり、一方、Lena の線を中心に見ると、かなり、明るく、肯定的で、喜劇的な印象すら与えるものになる。この小説は、21 章から成立し、そのうち、わずか、第 1, 2, 13, 17, 18, 21 の合計 6 章にしか Lena は実際には登場しないが、それにもかかわらず、筆者は、この作品の中心人物は Lena Grove ではないかと考える。その第一の理由は、この作品が第 1 章の Lena の内的独白、“I have come from Alabama: a fur piece”<sup>1)</sup> で始まり、第 21 章の再び彼女の台詞、“My, my. A body does get around. Here I aint been coming from Alabama, but two months, and now it's already Tennessee”<sup>2)</sup> で完結するからである。Lena がひとつの “urn” となって、その中に、Joe Christmas, Gail Hightower, Byron Bunch, Joanna Burden, McEachern, Lucas Burch, Doc. Hines, Mrs. Hines に関する物語りが「液体」となって流れ込み、彼らが Lena と直接間接的に、関りを持つと考えられる。Faul-

kner 自身も、*The Sound and the Fury* が Caddy の物語りから展開していくと述懐しているのと同じような方法で、*Light in August* に於ける Lena Grove の役割の重要性を指摘し、彼女の物語りからこの作品が展開していくと、言及している。

...that story (*Light in August*) began with Lena Grove, the idea of the young girl with nothing, pregnant, determined to find her sweetheart. It was—that was out of my admiration for women, for the courage and endurance of women. As I told that story I had to get more and more into it, but that was mainly the story of Lena Grove<sup>3)</sup>.

Lena Grove を *Light in August* の中心人物と考える第二の理由は、この小説の題名自体と Lena Grove に密接な関係があるように考えられるからである。Alfred Kazin は、“‘Light in August’ is itself a country saying: light as a mare or cow is light after delivery”<sup>4)</sup> と述べ、「雌馬、雌牛が出産後、身軽になる」という農村社会の方言に、この題名の“light”が由来していると断定しており、たしかに Lena は Jefferson で Burch との子供を出産し、身軽になるわけだが、Faulkner は題名の“light”について、Kazin のそれとは、全く異った見解を示している。

...in August in Mississippi there's a few days somewhere about the middle of the month when suddenly there's a foretaste of fall, it's cool, there's lambence, a luminous quality to the light, as though it came not from just today but from back in the old classic times. It might have fauns and satyrs and the gods and—from Greece, from Olympus in it somewhere. It lasts just for a day or two, then it's gone, but every year in August that occurs in my country, and *that's all that title meant*, it was just to me a pleasant evocative title because it reminded me of that time. of a luminosity older than our Christian civilization. *May be the connection was with Lena Grove, who had something of that pagan quality of being able to*

*assume everything, that's—the desire for that child, she was never ashamed of that child whether it had any father or not, she was simply going to follow the conventional laws of time in which she was and find its father*<sup>5)</sup>.

これによれば、題名の“light”は、物理的には、deep South 特に、Mississippi で 8 月のある日、突然に起きる秋の前ぶれのような「光」を示すことになり、精神的には、汎神論的な世界から照らしてきている「光」を示すことになる<sup>6)</sup>。特に Faulkner は前出の引用にみられるごとく、“light”と Lena の相互関係を強調したようである。彼は、Lena の示す、原始的な生命力は、キリスト教文明以前の、古代ギリシア時代からやってきている「光」であると考えているようである。事実、本作品にも Lena と「光」の関係を示唆する個所が、“Her face (Lena's face) is calm as stone, but not hard. Its doggedness has a soft quality, an *inwardlight-ed quality* of tranquil and calm unreason and detachment”<sup>7)</sup> のように見られる。Ad de Vries の *Dictionary of Symbols and Imagery* は light を、“creative force,” “comic energy,” “optimism”を示すと言及しているから、明らかに Lena の特質が light の特色に overlap するといえるであろう。更に、細かいことであるが、*Light in August* の本文中にも Christmas の目を通して、Jefferson の夜の光が、“It (Jefferson) just lay there, black, impenetrable, in its garland of Augusttremulous lights”<sup>8)</sup> のように、直接「八月の光」としてあらわれている。

Lena が生命力を現わす「光」であるとすれば、彼女の名前自体が、それを示していると言えるであろう<sup>9)</sup>。すなわち Lena は Helen の diminutive であり Helen は“torch”<sup>10)</sup>、光り輝くものを示す。そして彼女の family name の Grove は「木々のしげみ」であり、*Dictionary of Symbols and Imagery* によれば、Grove は“... associated with all kinds of religious, primitive worship of vegetable nature, e.g. the

Druids and the cutting of the Golden Bough (v. Mistletoe), human fertility-sacrifices”<sup>11)</sup> となり、肥沃豊饒さを示す。そして Lena が原始的な性質、生命力を持っているということは、*The Sound and the Fury* に於いて墮落前の Caddy が Benjy にとって、やはり「木の香り」がしたと感じられることに共通していると思われる。

Lena を主人公と考える第三の理由は、後述するように、彼女の示す「明るさ」が Christmas の持つ「暗さ」を超越している点において、彼女が、この作品で中心的な役割を果たしていることとみなされることである。

## (2)

第1章、第2章を中心に Lena の姿を、もうすこし具体的に捕えてみたい。彼女は12歳の時、病気で両親を相継いで失い、20歳年上の兄に引き取られ、彼の貧乏子沢山の家族と同居し、18～19歳になると、家人の寝静まった夜、家の窓を開け、Burch と密会を重ね、ついに、彼女は、自分が「困った状態」になっているのを知る。しかし、そうなっても、彼女は深刻には悩まず、ただそうなったことを、“That’s just my luck.”<sup>12)</sup> と自然に受け入れ、しかも “He’s going to send for me. He said he would send for me.”<sup>13)</sup> と言って、きっといつか Burch が彼女を迎えにきてくれると信じる。しかし、彼が迎えにこないのがわかると、兄から “whore”<sup>14)</sup> とののしられ、風の便りに Burch が Jefferson の製材所で働いているのを聞き、彼を探す旅へと出発する。Lena のこの行動に常識を逸した天真爛漫で極めて楽観的な性格が見られよう。

Lena は “From beneath a sunbonnet of faded blue, weathered now by other than formal soap and water, she looks up at him quietly and pleasantly: young, pleasant-faced, candid, friendly, and alert.”<sup>15)</sup> が示すように、感じよく、生命力に溢れ、率直で、物おじせず、敏活な田舎娘である。彼女を置きざりにした Lucas Burch (別名 Joe Brown) をたずねて

Alabama から Jefferson まで4週間臨月の体で、ほこりっぽい夏の田舎道を徒歩で、またある時は、途中、出会う Henry Armstid のような親切な農夫の馬車に便乗し、旅を続ける。馬車は、“the hot still pinewinery silence of the August afternoon”<sup>16)</sup> のような牧歌的な雰囲気の中を “like something moving forever and without progress across an urn”<sup>17)</sup> のように悠長に動いていく。

Lena は兄から貰った男物の大きな靴をはきバンダナハンカチの包みを持っている。その中には小銭でわずか35セントが大切に入れられている。彼女は、南部の農婦が使う、色あせたブルーの sunbonnet をかぶり、同じく色あせたブルーの服を着、服と同じブルーで縁取られている棕櫚の葉の扇を片手に持っている。ここで気付くのは、彼女が身につけているものは、その色が、ほとんど全てブルーであることだ。ブルーには、古来、魔よけの力があると信じられ、またもし Lena の中に聖母マリアの image を求めるならば、ブルーはその image にふさわしい色といえよう。なぜなら聖母マリアの服の色は、伝統的にいつもブルーと決められているからである。

“She looked at the wagon and the men once: a single glance all-embracing, swift, innocent and profound”<sup>18)</sup> が示すように、彼女の眼差しも、その無邪気な性質を示しているかのようなのである。その声も、常に、静かで、その笑みも、常に平和に満ちている。Faulkner は Lena を描写する時、本文中、“calm,” “serene,” “peaceful” のような形容詞を意図的と思えるほどに、繰り返し使っている。これらの形容詞には、人の心に、否定的な、不愉快な image を呼び起こすものは、なにひとつとしてない。

更に Lena の「母なる大地」の image を強調すれば、彼女が Christmas と Burch の住んでいた「小屋」で「出産」すること自体、象徴的と言えよう。すなわち、その行為を通して、彼女は「死」と「墮落」の象徴であった「小屋」に「生」をもたらすからである。特に menopause を迎えた Joanna Burden に対して「生命」を産

み出すことの出来る Lena は明らかな対比をなす。また、彼女の赤子自身も、Byron に対しては養子の役割を果し、Hightower に対しては代父となる機会を与え、Mrs. Hines に対しては一時的にはあるが、彼女の孫——Christmas と思わせる希望を与える。もう一步進めていくと第 21 章の Byron, Lena, 赤子の旅姿に、ヨセフ、聖母マリア、幼子イエスからなる Holy Family (聖家族) の image を重ねることも可能であろう。

次に Lena の人生に対する受け止め方を見たい。彼女が、どんな現実も肯定し、楽観的な見方をするということは、子供が産れる時、家族が揃っているべきで、特に最初に産れる子供の場合は、きっと神様がそうしてくれると単純に信じていることにも、あらわれている。だから彼女は、“I reckon a family ought to be together. When a chap comes. Especially the first one. I reckon the Lord will see to that.”<sup>19)</sup> という台詞を発する。彼女は、第 18 章で再会した Burch が再び、彼女から逃亡した時も、彼女は、“Now I got to get up again”<sup>20)</sup> と言って、その状態を平静に受け止め、赤子を抱いて、再び、新しい旅に出発する。また Jefferson から Tennessee への旅で、道連れの Byron が彼女に拒否された屈辱から、一時的に突然、姿をくらませた折も、彼女は、“... and I (furniture repairer) would see her (Lena) sitting there with her face as calm as church, holding that baby up...”<sup>21)</sup> が示すように、「教会のように穏やかな顔」をして、何事もなかったかのように平然と落ち着き払っている。以上のような例証の中に、Lena の楽観的な人生観が伺い知れよう。

“She went out of sight up the road: swollen, slow, deliberate, unhurried and tireless as augmenting afternoon itself”<sup>22)</sup> が示すように、ゆったりとして疲れを知らない「母なる大地」の image を持つ Lena は、多少、理想化され、観念的で、神話化されているようにも思えるが、Christmas を中心とする、暴力、殺人、因襲、人種的、宗教的偏見に満ちた Jefferson の

「暗い」「否定的」な「死」の世界に対して、Lena は「明るい」「肯定的」な「生」の世界を示していると言えよう。

### (3)

次に、他の登場人物との関りにおいて、Lena がどのような状態にあり、どのような役割を果しているか考察したい。“Folks have been kind. They have been right kind”<sup>23)</sup> と彼女が述懐し、また第 19 章で Jefferson の sheriff が、“Sho. Lots of folks beside me (sheriff) has been good to her (Lena) since she (Lena) came to Jefferson”<sup>24)</sup> と述べているように、彼女を取り巻く人々は、積極的に、彼女に対して同情と親切心を示す。(もっとも、これはまだ、古き良き時代の影響がある 1920 年代であったからで、現代社会では、このように事が運ばないだろう。)<sup>25)</sup> 第 1 章に登場する Armstid は Lena を自分の馬車に便乗させるばかりか、見知らぬ彼女を自分の家に泊める。彼の妻 Martha は Lena が未婚の母であると知っても、Lena が旅を続けられるように、自分のへそくりを、夫を介して彼女に与える。ほとんど全ての人が、Lena に対して同情し、善意に満ちた行動を示すことは、彼女が Jefferson に入った時も同様である。製材所で働く Byron は Lena を見た途端、生れて初めて恋をし、親身になって Lena の面倒を見、彼の下宿の女主人 Mrs. Beard に Lena の世話を託す。Mrs. Beard も Lena を自分の部屋に泊まらせる。引退牧師の Hightower は Bunch の要請を受け、Lena の出産の手助けをする。人々が Lena に対して献身的に奉仕するのは、多分、彼らが Lena の中に、「母なる大地」の image を見ているからではないだろうか。Lena は community から拒絶される Christmas とは異なり、彼女は community に受け入れられ、そして不思議なことに Lena が community の人々に共同体意識を目覚めさせ、その精神を強めさせる vehicle になっていると思われる。

次に Lena と人々の関わりを Joe Christmas,

Byron Bunch, Hightower に的を絞り、考えてみたい。下記の図 1 が示すように、Christmas とは一度も出合わず、まして言葉も交わさなく、あえていえば Lucas Burch (Joe Brown) を通しての間接的なつながりしか持たないが、あたかも Faulkner が意識的に作り上げたかのように Lena と Christmas は全ての面に対比するものとして描出されていて、明白な polarity が浮び上る。

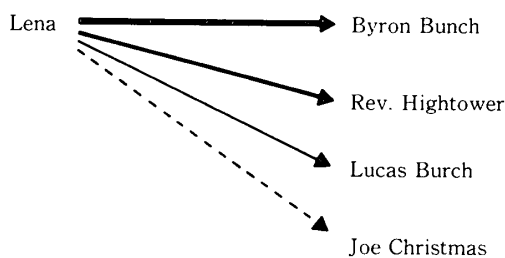
最初に Lena と Byron の関係から見たい。

Byron は 30 過ぎの小柄な男で、道で彼を見掛けたものは、二度と振り返っては見えないような目立たない平凡な存在である。謹厳実直を絵に描いたような男で Jefferson の製材工場で働き、同僚が町へ遊びに出掛る土曜の午後ですら、彼は唯一人、時間を正確に計りながら残業する。彼の唯一の「余暇」は、土曜の夕方から月曜の朝にかけて Jefferson を離れ、近郊の田舎の黒人教会でコーラス隊の指揮をすることだけである。そして、彼のこの行動は、唯一の友人である Hightower のみが知っている。このように、Byron は、ある意味で、彼の属する労働者社会からの「エグザイル」である。

しかし Lena の出現によって、彼の生活が 180 度方向転換をする。Lena が Burch の姿を求めて Jefferson の製材所に現われた時から、Byron は “Then Byron fell in love”<sup>26)</sup> が示すごとく、生れて初めて恋愛をして人との関わりを感じ、“Byron Bunch in town on Sunday”<sup>27)</sup> と Hightower が驚いたように、Byron は平素とは異なり、日曜も Jefferson にいて Lena の世話をし、滑稽なほど真剣になって Lena の「夫」探しに積極的に参加し、Lena の出産準備を手助けすることにおいて、“He (Byron) enters

immediately, with that new air born somewhere between assurance and defiance.”<sup>28)</sup> が示すごとく、彼の人生に確信と目的が生れてくる。そして Burch が Lena を再び置き去りにしたのを確信した彼は、第 21 章で一人前の「男性」として Lena を自分の手中に得ようとする。このようにして Byron は、明らかに Lena によって変化させられたと言えよう。彼は、また、哀れな Mrs. Hines のために、彼女の孫である Christmas の生命を守るよい手段はないものかとすら Hightower に相談を持ち掛ける。ここに社会に、comit しようとする Byron の姿が伺えよう。

二番目に Lena と Hightower の関係を見たい。彼も、社会から孤立した存在で、彼は南北戦争に於いて祖父の果たした重要な役割、すなわち過去の栄光にしがみついており、その幻想に生きている。そのようなことから妻と正常な関わりを持てなく、彼女を絶望させ、彼女に背信行為をさせ、果ては、「自殺」という形で、彼女を死に追いやる。Jefferson の住民から牧師の資格を剥奪された後も、隠遁者のようにして Jefferson に住み続ける。彼は前述の事件の他に、過去に、もうひとつ、心に傷 (trauma) を持っている。それは以前に、近所の黒人女性の出産を助け、不幸にして、その赤子を死なせてしまったことである<sup>29)</sup>。このような出来事のために、“I am not in life anymore,” he (Hightower) thinks. “That’s why there is no use in even trying to meddle, interfere”<sup>30)</sup> が示すように Hightower は生きる目的を失い、社会に参加することも拒否し、昼間はハンモックの中に生気のない太った身体を横たえてまどろみ、夕方に “twilight” の中、窓辺に座って、過去の事に想いを馳せ、「エグザイル」のような生活をする。そのような彼の生活態度を 180 度転換させるのが再び Lena である。すなわち Hightower は Byron の要請で、再び、無資格ながら、医者の来るまで Lena の出産場面に立ち合う。遅れて到着した医者に代り、Hightower は、今回は、無事に彼女の赤子を世に送り出すことに成功する。このことは、前述の、黒人女性の場合の com-



pensation ともなり得よう。計らずも、Lena を通して、生命を産み出す、創造という仕事の一端を援助した Hightower は “there goes through him (Hightower) a *glow*, a wave, a surge of something almost, triumphant as wave, a surge of something hot almost triumphant”<sup>31)</sup> が示すように、内側から暖い「光」のようなもの、勝利がこみ上げてくるのを感じ、そして、

“She (Lena) will have to have others (babies), more remembering the *young strong* body from out whose travail even there *shone* something *tranquil* and *unafraid*. More of them. Many more. That will be her life, her destiny. The good stock peopling in *tranquil* obedience to it the good earth: from these hearty loins without hurry or haste descending mother and daughter”<sup>32)</sup> が示すように、彼は Lena を通して女性の持つ「豊饒さ」「生命力」というものを、強く意識する。このようにして Lena は Byron と Hightower に、ある意味で生きていく上での目的を与え、life-giver としての役割を果たしていると言えるだろう。

最後に Lena Grove と Joe Christmas を比較したい。この二人の共通点は、両者とも子供の時、孤児になり、貧困の中、最低限度の生活をしてきたことである。しかし、同じような環境に育ったにもかかわらず、その性格、果す役割は両極端である。Lena が出産を通して生命を作り出す仕事にたずさわるのに対して Christmas は養父 McEachern を椅子で打ちのめし、Hightower を傷つけ、Joanna Burden を殺害することに於て生命を「破壊」する仕事に関わる。

Lena も Christmas も「平和」を求めているが、Lena の場合は「生」に於ける「平和」であり、Christmas の場合は、“It is just dawn, daylight: that grey and lonely suspension filled with *peaceful* and tentative waking of birds. The air, inbreathed, is like *spring water*. He breathed deep and slow, feeling with each breath himself diffused in the netur-

al greyness, becoming one with loneliness and *quiet* that has never known fury or despair. ‘That (peace) was all I wanted,’ he (Christmas) thinks, in a *quiet* and slow amazement. That was all, for thirty years. ‘That didn’t seem to be a whole lot to ask in thirty years.’”<sup>33)</sup> に現われているように、彼が逃走中、「自然」に「逃避」した時に、「孤独」の中に感じる「平和」であり “It will be there, musing, *quiet*, steadfast, not fading and not particularly threatening, but of itself alone *serene*, of itself alone triumphant”<sup>34)</sup> と、そして遂に “He (Christmas) just lay there, with his eyes open and empty of everything save consciousness, and with something, a shadow, about his mouth. For a long moment he looked up at them with *peaceful* and unfathomable and unbearable eye”<sup>35)</sup> が示唆するように、彼が「死」において、はじめて、Lena の特色とする「平和」「静かさ」に到達するのは、全く皮肉な事と言えよう。

Lena は、前述のように、人生における事柄を全て享受するが、Christmas は拒否する。例えば、細かいことであるが、食物を食べる場合 Christmas は、少年時代に、養母 McEachern の持ってきた食事を、一皿ごと、床の上にわざと投げ捨て、後に、それを犬、あるいは、野蠻人のように腹ばいになって、手でつかんでむさぼり食う。彼のこの食事の摂り方に、汚らしい否定的な image があらわれている。それとは反対に、Lena は道中 10 セントで買った「鰯の油漬けの缶詰」を、“She (Lena) begins to eat. she eats slowly, steadily, sucking the rich sardine oil from her fingers with slow and complete *relish*”<sup>36)</sup> が示しているように、心ゆくまで味わい、食べることで自体を楽しんでいる。Lena は、自分の「女性」としての本質、役割を、当然のこととして享受するが、Christmas は、彼がしばしば発する “pinkwomansmelling,” “womanfilth” からも推察することができるように misogynist で、終局的には、Joanna Burden を殺すことで女性を拒絶する。

Christmas と Lena の相違点について、彼らが実際に歩んできた「道」という点に、ポイントを絞って見ることもできよう。Christmas の歩んできた道は “In the quiet and empty corridor, during the quiet hour of early afternoon, he (Christmas) was like a shadow”<sup>37)</sup> のような、孤児院の閑散とした廊下で始まり、成人して都会の裏町を放浪していく時の道は “He (Christmas) thought that it was loneliness which he was trying to escape and not himself. But the street ran on: catlike, one place was the same as another to him. But in none of them could he be quiet. But the street ran on in its moods and phases, always empty.”<sup>38)</sup> であり、Christmas は、自分がどの町を歩いている、そこに属することが出来ないのを知る。そして彼が最後に Mottstown で捕われる時は、 “...he (Christmas) is entering it again, the street which ran for thirty years. It has been a paved street, where going should be fast. It had made a circle and he is still inside of it.”<sup>39)</sup> である。彼は、30 年間の環境また自分の放浪によって出来た「円」に閉じこめられ、どんなにもがいてもそこから外へは出られなく、その中で自滅していく以外は出来なかったのである。彼は vicious circle にはまっているのである。Christmas の行く道は、都会の暗い舗装してある無機質な裏道で、そこは、常に、「空虚」であり、「淋しく」、「冷たく」、それらは「負」の image を持ち、不毛を感じさせる。

それに反して Lena の道は、 “She (Lena) had been doing that now for almost four weeks. Behind her the four weeks, the evocation of far, is a peaceful corridor paved with unflagging and tranquil faith and peopled with kind and nameless faces and voices”<sup>40)</sup> のように確信に満ちた人々と共に歩む道で、舗装されていないために多少、埃ばいけれども、日の照る明るい田舎道である。彼女の動きは、Christmas のように堂々巡りしているのではなく、むしろ直線的なもので、その行く道は、常

に無限であり、開かれている open road である。彼女の歩む道は、未来の方向に、生き続けていく道(continuity を示す道)と言えよう。この点について François Pitavy も *Faulkner's Light in August* で筆者と同意見を示している<sup>41)</sup>。

Faulkner は Christmas の悲劇は、Christmas 自身、己れとは何人であるのか見きわめないこと、自分のアイデンティティを明確に把握していないことに、その端を発していると述べている。

I (Faulkner) think that was his (Christmas's) tragedy — he didn't know what he was, and so he was nothing. He deliberately evicted himself from the human race because he didn't know which he was<sup>42)</sup>.

これは、明らかに、現代人の直面しているアイデンティティの喪失や、自己疎外の重大な問題にほかならない。

しかし、その悲劇性にのみ、どっぷりと浸っていたのでは、何の意味もないし、人間は生き伸びられないのではないか。生きていくためには人間は己れの面する悲劇性をみつめながらも、それを超越する、ある原始的な生命力を持たなければならない。それが Lena のあらかず生命力と言えるであろう。彼女は *The Unvanquished* の Aunt Jenny や *The Sound and the Fury* の Dilsey と同様、時々、引用される個所だが、Faulkner が Nobel Prize Speech で “I (Faulkner) believe that man will not merely endure: he will prevail. He is immortal, not because he alone among creatures has an exhaustible voice but because he has a soul, a spirit capable of compassion and sacrifice and endurance”<sup>43)</sup> と述べているような耐え忍び、そして生き伸びる人間の姿をあらわしていると思われる。

Lena を「不毛」な Joanna Burden、男性の役割を強いられ自ら「女性」を放棄しようとする *The Unvanquished* の Drusilla Hawk、母親の

役割を十分に果せない *The Sound and the Fury* の Mrs. Compson また、墮落して Compson 家の disgrace となる, Caddy, “A Rose for Emily” の哀れで気の狂った老女 Emily Grierson と比較すれば, Lena がいかに, 健康的で, 女性としての役割を何も疑わずに享受する女性であるか理解できよう。Lena が Faulkner の理想とする女性像の一面をあらわしていることは断言することが出来るであろう。ちなみに, Faulkner が女性像を描くにあたって, 以下のような興味ある comment をしているので, それをここに紹介して, Lena の一考察の結びとしたい。

It's much more fun to write about women because I (Faulkner) think women are marvelous. They're wonderful, and I know very little about them, and so I just... it's *much more fun to try to write about women than about men* — more difficult, yes<sup>44)</sup>.

## (注)

- 1) 本論文中 *Light in August* の引用箇所は, 全て *Light in August*, London: Penguin Books, 1932 (1981) による。
- 2) *Ibid.*, p. 381
- 3) Gwynn, Frederick L. and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958*, Charlottesville, Va.; The University of Virginia Press, 1959, Italics mine.
- 4) Kazin, Alfred. “The Stillness of *Light in August*,” *Faulkner: A Collection of Critical Essays*, edited by Robert Penn Warren, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1966, p. 148).
- 5) *Faulkner in the University*, p. 199, Italics mine.
- 6) *Light in August* の発版本の中表紙の挿絵は, 右上記の図のように, Lena が赤子を出産する小屋の上に, 天空より「光」が差し降りているのを示している。
- 7) *Light in August*, p. 16, Italics mine.
- 8) *Ibid.*, p. 89.
- 9) Hawthorne の *House of the Seven Gables* の Phoebe も Lena と類似の役割を果たす。Phoebe はギリシア語で “Shining, shining one” を示す。

## LIGHT IN AUGUST

WILLIAM FAULKNER



RANDOM HOUSE New York

- 10) torch... “Lena” は “Helen” の diminutive であり “Helen” は “torch” を示し, “bright” をあらわす。torch は spiritual light も示す。
- 11) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*: London: North-Holland Publishing Co., 1974, p. 229, Italics mine.
- 12) *Light in August*, p. 7.
- 13) *Loc. cit.*
- 14) *Loc. cit.*
- 15) *Ibid.*, p. 11, Italics mine.
- 16) *Ibid.*, p. 8.
- 17) *Loc. cit.*
- 18) *Loc. cit.*
- 19) *Ibid.*, p. 18.
- 20) *Ibid.*, p. 325.
- 21) *Ibid.*, p. 379, Italics mine.
- 22) *Ibid.*, p. 12.
- 24) *Ibid.*, p. 317.
- 25) 『朝日新聞』の 1993 年 10 月 25 日付に, 当然, 今でも, 妊娠中の女性, 子連れの女性に対しては社会から大変に暖い目が向けられることが多いという記事が掲載されていた。
- 26) *Light in August*, p. 38.
- 27) *Ibid.*, p. 59, Italics mine.
- 28) *Ibid.*, p. 235, Italics mine.
- 29) Hightower が, この黒人女性の赤子の「父親」とも言われていて, 「故意」にその赤子を殺害したとも推察される。



- 30) *Ibid.*, p. 226.
- 31) *Ibid.*, p. 304, Italics mine.
- 32) *Ibid.*, p. 305, Italics mine.
- 33) *Ibid.*, p. 249, Italics mine.
- 34) *Ibid.*, p.
- 35) *Ibid.*, p. 349, Italics mine.
- 36) *Ibid.*, p. 24, Italics mine.
- 37) *Ibid.*, p. 91, Italics mine.
- 38) *Ibid.*, p. 170, Italics mine.
- 39) *Ibid.*, p. 255, Italics mine.
- 38) *Ibid.*, p. 7, Italics mine.
- 41) Pitavy, François. "Thanks to him (Gail Hightower) and Lena, and in spite of the Faulknerian irony and ambiguities, *Light in August* does not close upon a pessimistic vision of the human state: this is a work which remains *open*, be it only to the many possibilities of interpretation" (*Faulkner's Light in August*, Bloomington: Indiana University Press, 1973, p. 8, Italics mine).
- 42) *Faulkner in the University*, p. 72.
- 43) Jelliffe, Robert A., ed. *Faulkner at Nagano*, Tokyo: Kenkyusha, 1962, pp. 205-206., Italics mine.
- 44) *Faulkner in the Universtiy*, p. 45, Italics mine.